

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

学年全体の雰囲気明るくし、生徒が安心して過ごせる環境を整えることを目指して、人間関係を深める取組「エンジェルハート」を実施した。生徒同士の自然な交流を促し、教室が心地良い居場所となるよう工夫した。

活動では、生徒一人一人が「エンジェル(親切をする人)」となり、指定された相手に1週間、さりげない親切を届けた。声掛けや応援メッセージ、手助けなど、相手に気付かれないよう思いやりを示すことで、自然なつながりが生まれるようにした。活動前後には、自分の「幸せ度」をパーセンテージで考えさせ、心の変化に目を向けさせた。

振り返りでは、誰が自分のエンジェルだったかを発表し合い、互いの行動を称えた。「人の優しさに気付けた」、「またやりたい」といった声も多く、生徒同士の関係づくりに良い影響が見られた。教員はファシリテーターとして関わり、生徒の主体的な取組を支えた。活動期間中は教室の雰囲気が和らぎ、生徒同士の新たな交流も生まれた。

続いて行った道徳の授業では、クラス全員が安心して過ごせる環境づくりを目指し、マナーについて学習した。生徒同士で「自分にできること」を話し合い、それぞれが実践できる内容を自分の言葉で書き出すことで、マナーを大切にしている意識を高めた。



【取組2】(B中学校)

美術の授業で、生徒の進度に応じた配慮がなされ、遅れている生徒には余裕を与え、進んでいる生徒には次の課題を提示することで、誰もが安心して取り組める環境が整えられていた。レポートや作品の題名に悩む生徒には、他の例を共有したり、教師がヒントを与えたりしながら本人の意見を尊重し、自己決定の機会を確保していた。こうした配慮により、生徒が主体的に学び、安心して教師に発言できる雰囲気が築かれていた。

【取組3】(C中学校)

不登校の未然防止を目的に、校内研修を実施した。研修では、「児童・生徒を支援するためのガイドブック」を活用し、長期欠席の区分などの基礎知識の共有に加え、魅力ある学校づくりに向けて、生徒の個性を踏まえた「役割づくり」について協議した。また、生徒意識調査の結果と教員による予想を照らし合わせて考察し、教職員間で生徒対応の共通理解を深めるとともに、PDCAの視点から教員の実践を振り返る機会として活用した。

多様な学びの場を確保する取組

(「早期支援」及び「長期化への対応」の取組)の推進

支援会議 (D中学校)

週1回、管理職、学年教員、養護教諭、SC、不登校対応巡回教員、別室支援員等が専門的視点を持ち寄り、合理的配慮の検討や別室の運用、生徒が教室に入れない場合の段階的支援などを協議している。学級担任が一人で対応せず、多面的に生徒の状況をアセスメントし、支援方針を共有し、柔軟な対応を図っている。

アウトリーチによる支援 (E中学校)

夏季休業日中に学級担任・不登校対応巡回教員が家庭訪問を実施した。生徒本人との対話で校内別室の利用の意思を確認し、後日、当該生徒が巡回教員と共に登校し校内別室の利用につながった。中学校1年生で突然登校できなくなったケースであり、早期のアウトリーチ支援が登校への一歩を後押しした。

校内別室における支援 (B中学校)

校内で活用されていなかったエクササイズバイクを校内別室に設置した。人目を避けて生活する生徒が多く、運動不足が課題となっていたため、タイムを活用して運動の機会を提供した。生徒たちはスポーツジムのような感覚で、軽く汗をかきながら意欲的に取り組んでいる。今後は、地域で使われなくなったヨガマットやバランスボールなどの運動器具の寄付を受け入れる体制を整え、より多様な運動環境を整備していく。加えて、簡単なストレッチなどを紹介する掲示物を設置し、自分のペースで心身を整えられる空間づくりを進める。



デジタル機器を活用した支援 (C中学校)

授業配信により、生徒が時程に沿って学習に取り組むことで、教室復帰に向けた環境づくりが進められている。教員や支援員のサポートの下、学習用アプリを活用し、生徒のペースで個別学習に取り組めるようにすることで、学習意欲の向上を図っている。



関係機関との連携 (A中学校)

週1回、不登校対応巡回教員・SC・SSWが情報共有を行い、支援方針を確認している。対面での支援が難しい生徒については、家庭訪問や保護者との面談を通じて状況を把握し、継続的な支援につなげている。生徒本人との交流は、学級担任と巡回教員が工夫を凝らした方法で行い、安否確認も兼ねている。

成果

どこにもつながっていない生徒は0人で、復帰への意欲も見られる。教員、専門家の連携や協議により、生徒が安心して学べる環境が整い、家庭との連携も深まりつつある。

課題

教職員を含め、学校内外の様々な関係者と連携を図りながら、校内別室での持続可能な支援体制の整備を進めていく必要がある。